

〈解答〉

- ① 1 イ、エ (順不同・完答)
2 ①：ア ②：太政大臣 (両解)
3 ウ
4 (1) エ (2) イ
5 〔例〕大阪は、諸藩の蔵屋敷が立ち並び、天下の台所と呼ばれた。

配点 ① 4 は各 1 点、他は各 2 点 10 点満点

〈解説〉

- ① 1 聖武天皇は、政治の力や古くからの神への信仰だけでは災いを防げないと考え、仏教の力で国を守り、不安を取り除こうとした。そこで、行基など、仏教の教えに基づいて橋やため池などをつくり民衆の信頼を得ていた僧侶たちの協力を得て、都に東大寺を建て、地方には国ごとに国分寺と国分尼寺をつくった。東大寺の大仏はそのシンボルとしてつくられた。また、唐から招かれた鑑真によって唐招提寺がつくられ、寺院や僧の制度も整えられた。
- 2 鳥羽上皇の死後、天皇と上皇との対立や貴族の間の対立が激しくなり、都で保元の乱と平治の乱という二つの内乱がおこった。保元の乱では、後白河天皇に味方した平清盛と源義朝が勝利し、平治の乱では、平清盛が源義朝を破って勢力を広げた。平清盛は、後白河上皇の院政を助け、武士として初めて太政大臣になった。
- 3 11世紀以来、日本と宋・高麗との間には民間の商人による貿易が盛んに行われていた。平清盛は、航海の安全を確保するため瀬戸内海の航路を整え、大輪田泊（兵庫県神戸市にあった港）を修築して日宋貿易を進め、自らの重要な経済的基盤とした。
- 4 (1) 室町時代の近畿地方やその周辺の村では、有力な農民を中心に人々の団結が強まり、自治を行う組織がつくられた。こうした村の自治組織は惣と呼ばれ、しだいに各地に広がった。ア、ウは江戸時代、イは奈良時代である。
- (2) 室町時代には、将軍や主な守護大名は、公家の文化に親しむようになった。足利義満が京都の北山に建てた金閣には、公家と武家の文化がとけ合うという特色がよく表れており、義満のころの文化を特に北山文化という。アは鎌倉時代、ウは江戸時代、エは奈良時代の文化である。
- 5 大きく発展した江戸・大阪・京都は三都と呼ばれた。江戸は、政治の中心として「将軍のおひざもと」と呼ばれ、18世紀の初めには人口が100万人をこえた。大阪は、商業の中心地として「天下の台所」と呼ばれ、各藩の蔵屋敷に運び込まれた年貢米や特産物の取り引きで発展した。